

[掲載紙] 読売新聞「先読み深読み」

[掲載日] 2013年3月7日

[テーマ] 農業に革新呼ぶ理数の力

「3月14日は何の日？」と問われれば、「ホワイトデー」と答える人が多いだろう。しかし、理系の学生は世界的に有名な「円周率の日」と答えるかもしれない。群馬で理系と言えば、上毛かるたの「和算の大家」関孝和を連想する。関は、後に「算聖」と称されたように、同時代のニュートン、ライプニッツと並び、日本が誇る江戸時代の大数学者だ。

関が研究し弟子たちが発展させた高度な「和算」は、「関学」と呼ばれて江戸時代に広く普及し、その後、様々な分野で実践的な学問として活用された。「老農」と称えられた船津伝次平も関学を学んだ一人であり、在来農法に西洋農法の長所を取り入れた混合農法を考案し、全国各地を回って農業技術の講演や学生の教育指導を行うなど、農業振興に努めた。また、関と同郷の高山長五郎は、高山社を設立し、養蚕方法の開発・普及や人材教育に力を注いだ。このように、先人たちの農業技術に関する研究開発や人材育成への粘り強い取り組みが継承されてきたこともあって、県内では多彩で多様な農業が展開されている。

もともと、他県や海外の農業も高度化・多様化が進んでいる。県産農産物が消費者にとって魅力ある商品と認められるためには、優れた品種や技術の開発・育成に取り組み、品質を高める努力が不可欠だ。日常食のキャベツでも、時間をかけて改良され丹念に栽培指導されている品種が少なくないことを、県内主力種苗会社の社長から教わり、農業の静かなる進化に感嘆した。

効果的で効率的な販売戦略を展開することによって、県産農産物の知名度やブランド力を高めることも必要だろう。生産・加工・販売を一体的に運営する6次産業化が脚光を浴びているが、販路拡大を目的とするだけでなく農産物のサプライチェーンを見直す契機になることが望まれる。このような取り組みを通じて農業が魅力あふれる産業とみられれば、不足する担い手の確保にもつながる。県内の中学生は、全国の中でも理科の成績が優秀で応用力もある。県内農業の担い手候補として、大いに期待が持てるだろう。

「全国学力・学習状況調査」の中学生・平均正答率（％）

	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
群馬県	77.3	65.5	63.7	53.0	55.2
全国平均 (国公立)	76.1	64.2	63.6	51.1	52.1

(出所) 文部科学省「平成24年度 全国学力・学習状況調査」

農業関係者の目下の大きな関心事はT P P（環太平洋経済連携協定）への交渉参加を巡る動きだろうが、その結論はともかくとして、農業の競争力強化は避けて通れない課題だ。「伝統は革新の連続」と言われるように、県内農業の伝統を守るためには、旧来の仕組みや方法にとらわれない革新的な取り組みを続けていく努力が求められている。

（ 日本銀行前橋支店長
相良 雅幸 ）